

献 辞

泉武夫先生が、2011年3月末をもって定年退職をされ、専修大学を去ることとなりました。すでに専修大学は、先生に名誉教授の称号をお贈りし、その功績をたたえております。ここでは、泉先生の経歴と、研究、教育、大学運営への貢献をご紹介します。先生をお送りする言葉に代えたいと思います。

泉武夫先生は、1940年6月に宮城県角田市に生まれ、県立角田高校を卒業後、1961年に専修大学商経学部経済学科（現在の経済学部）に入学し、1965年に卒業されます。その後、専修大学大学院経済学研究科修士課程に進学し、1968年3月に修了され、同博士課程に進まれました。博士課程在学中の1970年5月に専修大学経済学部の助手に採用され、1972年3月まで務められた後、同年4月に専修大学経済学部専任講師となり、1976年に助教授に、また1984年に教授に昇格されています。

先生は、経済学部の学生の時に、内田義彦教授のゼミナールに所属され、とくに山田盛太郎著『日本資本主義分析』に出会い、学問の道を歩まれる決意をもたれたのでした。そして、学部の卒業論文では、『日本開化小史』を中心に研究した「田口卯吉論」を執筆したのです。大学院へ進学されてからは、小林良正教授の指導を受け、修士論文「明治末期における綿業再編成と労働力構造」を書かれたことであらわれているように、近代日本の典型的な大工業である綿工業の発展を軸に、日本資本主義とその発達史を研究されました。

先生の研究は、修士論文の成果を公表された「転換期における日本綿業—明治末期における構造変化分析」から出発し、「日本綿糸紡績業の独占化に関する覚書」、「1910年代における日本綿糸紡績業の展開—その独占転化に関して」、「独占的巨額紡績資本の生産構造と搾取基盤—第一次大戦期の鐘紡を事例として」、「昭和恐慌期における日本綿糸紡績業の動向」と、大正・昭和期における綿工業の独占化の過程と構造の研究を進められました。同時に、「1910年代～20年代における日本資本主義の重化学工業化に関する一つの素描—特に日本鉄鋼業の推転を中心として」において、日本資本主義の重化学工業化を視野においた研究や、「大正期綿紡の労働事情と合理化—日本の原生的労働関係との関連で」と国連大学の受託調査プロジェクト研究である「綿業における技術の変容と開発」では綿工業における労働問題に焦点をあわせた研究を発表されました。さらに、

1981年から翌年にかけて長期在外研究のため渡英され、マンチェスター大学の客員研究員として現地での調査研究に集中されてからは、『『イギリス綿業報告』をとおして見た1930年前後のイギリス綿業の実情と日本の競争』、『1930年代世界綿布市場における日英綿業の確執』、『戦間期世界綿布市場における日英綿業の確執についての序章—1920年代の展開』と、世界市場における日本とイギリスとの衝突、その展開の研究へと向かわれたのでした。

先生は、教育においては、「日本経済史」や「現代日本経済史」を主要担当科目とされ、また多くのゼミナール生の指導にあたりました。先生は、研究と教育において業績をあげられると同時に、専修大学の教学・運営において要職に就かれ、この面での功績はきわめて大きなものがあります。1995年には、社会科学研究所所長に就任されました。また、翌96年9月から二期4年にわたって、経済学部長を務められました。学部長在任のあいだには、「学生による授業評価」をはじめて実施するなど、教育改革に取り組みられました。さらに、2003年1月から四年間にわたり、大変困難な時期の専修大学北海道短期大学の学長の任に就かれ、生田キャンパスで経済学部の授業をおこなうと同時に、北海道美幌市とのあいだを頻繁に行き交う激務をこなされたのです。また、学校法人専修大学の役員としても活躍され、1995年から四年間と2003年から四年間に、理事・評議員の仕事もされ、とくに2003年からの四年間の北海道短期大学長の時期には常勤理事として多忙な任を果たされました。

先生は、専修大学に入学されてからちょうど半世紀のあいだ、研究、教育と大学運営のすべての分野でお忙しく仕事をされましたが、経済学部や専修大学の同僚たちがよく知っているように、いつも笑顔を絶やさず、まるでそうしたご多忙さを感じさせることのない、ゆったりとした態度で接して下さいました。

泉先生、今後とも健康に留意されて、ご自愛下さい。また時に、専修大学や経済学部にご教示とお力添えをいただければ幸いです。先生のご古稀とご定年での退職をお祝いし、私の献辞とさせていただきます。

2011年3月

専修大学経済学部長 浅見 和彦